三六六号　平成二十五年一月十日

ながさきの空

――長崎歴史文協短信――

新年のご挨拶

長崎歴史文化協会会長　篠原　俊一

平成二十五年を迎え、謹んで御祝詞申し上げます。

旧年中は、当協会が主催いたしました、講演会・学習会をはじめ恒例の史跡見学会・研修などの諸行事に対し、皆様方から多大のご支援、ご協力をいただき熱くお礼申し上げます。

おかげさまで、当協会の活動も三十一年目を迎え、県内外から高く評価されているところでございます。この『ながさきの空』も定例の発刊を重ね三百六十六号を刻むこととなりました。

本年も『長崎学』を中心に、長崎の歴史文化を研究し、地域文化の振興に貢献してまいりたいと考えておりますので、引き続きご支援くださいますようよろしくお願い申し上げます。

平成二十五年　巳年によせて

越中　哲也

先ずは　新年を迎え　お祝詞を申し上げます。

本年は旧暦の干支（十干十二支）によると「癸巳」の年であり、癸の文字は十干最終の文字である。

十干十二支の暦法は中国殷の時代（BC14―11）に始まるとされている。「十の文字は幹の意であり、支は枝である」と説明され、十干とは天然自然発生の本質とされる五行（木火土金水）に兄（強・前）と弟（弱・後）のある事を考え十の数をあて、それに「甲乙丙丁戊巳庚辛壬癸」の文字を当てたとされている。

十二支は、中国の暦法天体季節十二（一月より十二月）の数（文字）を基とし、その十二の数に十二種の動物（子・丑・寅・卯…）を当てている。

我が国に之の中国式暦法が何時頃より伝えられたのか確実な事は不明であるが、正倉院御物の中に「十二支刻彫」がある事によって天平時代（七二九―）には既に十干十二支が我が国に伝えられていたとされている。

癸の文字については「癸は揆であり、其の意は万物揆然して萌芽す」と記してあり、巳の文字は「万物巳に盛りを極め、これから実を結ぶ時に移る事」をあらわし、「蛇」の文字を当てている。そして其の蛇には次の種類があると中国の古書に記してある。

滕蛇　蝮蛇　蚺蛇　鉤蛇　髯蛇　坂蛇　鷄冠蛇　爆身蛇　青葱蛇
白花蛇　三角蛇　華山蛇など

蛇は変化するといい、「三角蛇には角あり」とあるので長崎くんちの「蛇踊り」の蛇は三角蛇ではないであろうか。蛇の文字の音はシャ・ジャ・タ・ダ・チ・ヂと諸橋辞典には記してある。

我が国で最初に大蛇が登場してくるのは古事記上巻で次のように記してある。

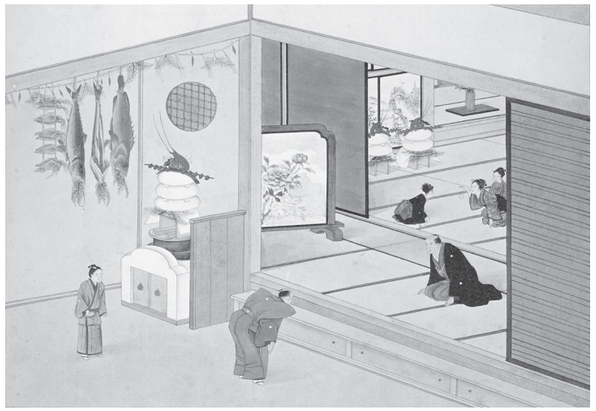
於是八百萬神共議而、於速須佐之男命…命は逐はれて出雲国の肥の河上なる鳥髪に降ってこられた。そこに老夫が童女を中に置いて泣いていたので、命が其の理由をたずねられると老夫婦は「ここに高志の八俣遠呂智年ごとに来りて喫ふ。命が其の遠呂智の形の事をきかれると二人は「其の日は赤加賀地（赤いほうづき）なして身一つ、頭八ツ、尾八ツあり、亦その身に蘿また檜榲おひ、其の長さ谿八谿、尾は八尾を渡、其の腹をみれば悉く常に血爛れたり」と説明している。

命はこのオロチに大酒を飲ませて酔せ切りたまひ、其の中の尾より草薙の大刀を見いだし、出雲の国の須賀に宮居を作り坐しまし全てが目出度し。この地は雲たち登る出雲の地である言はれ、次の御歌が記されている。

夜久毛多都　伊豆毛夜幣賀岐　都麻基微爾　夜幣賀岐都久流
曽能夜幣賀岐袖

記・前文の「出雲の須賀」について日本国文学大系（国民図書ＫＫ昭和二年刊）には次のように記してある。書記に「遂に出雲の清の地に到る」今は清を諏訪とよんでいる。私は須賀はすがすがしい処の意と解している。

長崎と蛇の話では、長崎の氏神諏訪社の「おつかい」が白蛇であったとする伝承があった事をとりあげてみた。其の話は長崎市史神社教会部（昭和四年刊）に次のように述べている。



新年挨拶図（越中文庫より）

寛永十五年（一六三八）春二月二七日、夜神前の燈火が煌々と輝いていたが、翌二十八日巳之刻（午前十時頃）になっても、其の光は一向にかわらなかったが、其の間の卯の刻（午前六時頃）神主の青木永忠が社殿に参拝したところ、社前の階に大きな（数尺）の白蛇がパッと其の姿がみえなくなった。永忠は早速、父賢清に此の白蛇の話を報告したところ、賢清は次のように言ったと記してある。

島原の乱、必ずや今明日を以て落去するであろう。火明の灼熱たると云ひ、白蛇玉階に現出せしと云ひ、是れ畢竟神命幕軍を庇護し給うの意である。諏訪社の祭神は軍神に渡らせ給う故、神・征伐を助け給はば何人か是に抵抗し得るものぞ。神家一同・杯をあげて未だおわらざるに島原の乱退亡の吉報いたる。

文中にある賢清は諏訪神社開創の人で肥前唐津の青木氏の一族であったが一族の事もあって賢清は佐賀に移り、武雄黒髪神社（当時は修験道大智院）にて両部修験道（山伏）を学び、更に京都に行き吉田家で神道も学んでいる。永忠は賢清の次男で寛永九年（一六三二）諏訪社二代宮司を継席し、諏訪社に最初の神楽を奉納したと記してある。

諏訪社と白蛇の話は更に長崎町年寄薬師寺家の家譜にもつながっている。「長崎港草」によると寛永十一年九月九日（一六三四）磨屋町薬師寺氏の祀る所の祠に妻が飯を盛り供したところ、頃ありて白蛇が飯上に盤結していた。妻は驚いて扇を開いて棚の上に置き祝して次のように言った。「若し是明神ならば則ち此の扇面に入らる可し」。すると白蛇は扇の上に入り棚より動くことはなかった。夫よりすぐに家人を外出中の主人（薬師寺久左衛門）のところに行かせ、この事を告げた。忠左衛門は神官青木賢清と共に家に帰り、大いに神の霊験を慶び邸内に祠を建つ。「之れ諏訪町の町名の由来也」と記してある。

また、長崎半島川原村（現在長崎市）に大池があり、其の池は天徳二年（九五九）領主高満大夫の娘阿池姫が「大楠の精」に誘われ五丈の大蛇となったが後に知行阿闍利の供養により「池之御前社」として祀られたと「長崎の伝説」（昭和五六刊）には記してあるが、其の原本には「姫は龍になり」とある。又現西海市太田和町池崎にある池の主は龍とあり、この池崎の龍は川原の龍を助けて天草鬼池の龍と戦ったと伝承され共に龍神となっている。（川原も大蛇ではなく龍神であろうか。）

最後に巳は蛇であり、その蛇が、我が家に現われることは「巳（実）のる」ことであり実に嬉ばしい事であるとされ、更に「銭の上に載った蛇の夢」をみたら幸福の至りであると昔の人は言っている。

風信

○元亀元年（一五七〇）長崎の港を中心にした新らしい街がつくられ、元亀二年春（一五七一）には其の新しい街にTVVeiga船長のポルトガル船が入港している。そしてこの頃すでに大村・口之津・有馬方面はキリシタンの町になっていた。

○その頃のお正月はどうなっていたであろうか。一六〇二年、長崎のコレジオ（学校）でつくられたVOCABVLARIO（日本語辞書）にはXinnen。Xinnenmo guioqai（訳文・尊敬する人に言う新年のよろこび）Cadomatcu（新年に門口にたてる松）Zōni（Xōguachiに出されるMochisと野菜とで作った食物の一種。）などの記載がある。当時すでに長崎にも門松や雑煮の風習があった事がうかがえる。

○正月二日は「縁起物としてトウラゴ（なまこ）を食べる事を忘れぬように」と長崎風俗史に記してある。それは長崎貿易輸出品の第一が俵物であったからだと言う。

○本会の新年は一月七日（月）より「事務所びらき」を致します。本年も月・水・金の週三回、午前十時より午后三時まで開設しておりますので御自由にお立ち寄り御歓談下さいませ。

○尚一、二月は寒い季節であり、毎週月曜午前開催の「長崎学講座」、火曜日午前の「長崎古文書を学ぶ会」、水曜午后の「懇話会」、金曜午后の「食文化サークル」ともに休講とし、三月より再開いたします。但しお問い合わせ等の件につきましては御自由に御立寄り、御連絡くださいませ。

長崎歴史文化協会研究室
TEL八二一一一五四〇
十八銀行公会堂前出張所二F

カット　中村　繁勝　なんばんえびす